

# 平成 25 年度研究成果情報

課題名：アゲマキ母貝集団の効果的創出方法の検討

## [背景・ねらい]

アゲマキは、かつては有明海佐賀県海域の泥干潟で多く見られる二枚貝として、漁業生産の上でも極めて重要な位置を占めていたが、平成 2～3 年にかけて激減し、平成 4 年以降、20 年近くほとんど漁獲がない状態が続いている。

このため、種苗生産・放流技術を開発し、アゲマキ母貝集団の効果的な創出方法を確立することにより、資源の再生産力回復を図る。

## [成果]

(1)平成 21 年度以降の 5 ヶ年で、放流用の稚貝(殻長約 8mm)約 419 万個を生産し、これらを佐賀県沿岸の 11 地区に放流した。このうち、太良町地先に放流したアゲマキは比較的良好に生残し、放流 2 年後には漁獲サイズ(70mm)を超え、順調に成長していることを確認した(図 1)。

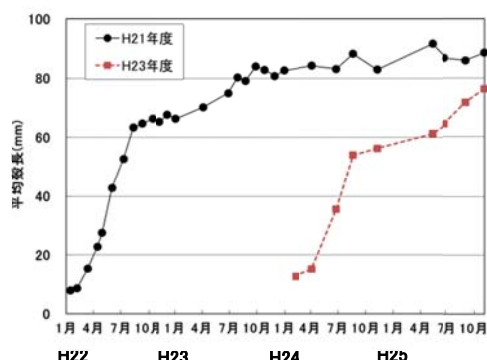


図 1 放流後の成長(太良町地先放流群)



図 2 囲い網

(2)太良町地先に放流した平成 21、23 年度放流群は、9 月から 11 月にかけて肥満度が低下し、生殖腺組織切片の状況からも産卵したことが推測された。また、太良地先の海域でアゲマキの浮遊幼生を確認したことから、母貝集団として機能していると思われた。

(3)放流直後の散逸を防ぐ方法として、囲い網(図 2)を設置したところ、放流から 15～28 日経過後の生残率は、対照区に比べ、1.4～2.0 倍であった。

(4)7 月に太良町地先の放流アゲマキ(8.4kg)を市場に試験出荷したところ、取引価格は 4,167～5,000 円/kg であった(図 3)。



図 3 試験出荷されたアゲマキ

## [課題・問題点]

・囲い網で一定の散逸防止効果は得られたものの、手間がかかることや、散逸防止効果が不十分であることから、放流直後の散逸を防止する手法のさらなる改良(放流手法、サイズ、時期、囲い網の目合い等)が必要である。

## [今後の対応]

・放流直後の散逸を防止する手法の改良を行う。

## [その他]

研究期間：平成 21～25 年

研究担当者：資源研究担当 神崎博幸